

じやりみち

・・・被災地支援情報・・・

海外援助市民センター構想

CODE



阪神・淡路大震災の教訓を生かし、民間から海外の被災地を支援する拠点となる「海外災害援助市民センター(*CODE)」(仮称)の設立を目指す構想委員会が3月19日発足した。震災後の6年、KOBEOの市民団体等がネットワーク(救援委員会)を組んで、サハリン地震から始まりインド西部地震に至るまで、25回の救援活動を実施してきた。その実績を元に、海外における災害救援をより有機的に展開するため、課題を整理し、多くの知恵と経験を共有しようというのである。今まで災害が起こる度にその都度立ち上げてきた救援委員会を恒久的なものにし、減災(災害後の被害を最小限にすること)や予防のための啓発啓蒙も視野に入れている。

2001年1月31日、神戸大学大学院国際協力研究科の芹田健太郎教授を代表に5人の呼びかけ人による構想委員会の呼びかけ文(次頁)を発表し、準備室事務局を当センター内に開設した。第3回構想委員会(7月23日)の時点で、神戸YMCA、コープこうべといった救援委員会の関係者はもとより、市民団体、研究機関、マスコミ、国際機関、行政機関などの関係者も含めて64名の賛同者を得ている。インターネットを通じて情報を共有しているため、会議に直接参加できない東京や九州からの賛同者もいる。また、救援活動のパートナーとして知り合ったメキシコとインドのNGOのリーダーも、この呼びかけに賛同してくれた。

多くの人に関わっているだけに、CODEに対する想いも様々である。構想委員会の議論はゼロからスタートした。どのような理念を掲げ、どのような支援活動を行うのか。阪神・淡路大震災の被災地KOBEOにある市民のセンターとして、何を発信して行くのか。どのような組織で運営していき、それを支える財源をどう確保するのか、等々決めなければならないことが多岐に渡っている。そこで、4つのワーキンググループ(以下"WG")~ガイドライン、支援プログラム、人材育成、資金調達~に分けて検討している。各WGの議論はインターネットを通じて全員で共有し、2ヶ月に一度の構想委員会で意見をもらい、またWGで検討するという手法を取っている。まだまだ検討途中だが、各WGに出ている主な意見を紹介したい。

<ガイドラインWG>

- ◎どのような災害でも困っている人に手を差し伸べるのが根本で、大原則としては線引きしない。地球全体としてみると貧困な国、貧困な層の人に最も大きな被害が出るという現実がある。国際的に連携する必要がある。
- ◎被災地の文化や社会的なバック、風土などへの配慮もある。現地NGOとの連携、救援の原則、ルールといった規範は必要かもしれない。
- ◎できるだけ早い時期に被災当事者が復興の主役になるしくみを作るために、コミュニティ支援を軸に据える。
- ◎KOBEOで作られるCODEの意味、メッセージ性を大事にしたい。
- ◎ガイドラインも定まったものではなく、活動の中で見直していくものであっていい。

*CODEはCitizens towards Overseas Disaster Emergencyの略です。直訳すると「海外災害緊急事態に対処する市民たち」となり、緊急時だけではなく先に残る、減災につながるものも含めて災害自体に対応する、考える市民のことです。

私たちは大きなことはできません。ただ小さな愛をもってやることはできます。(マザー・テレサの言葉より)

第68号 発行日 2001.9.12
被災地NGO協働センター

〒652-0801 神戸市兵庫区中道通2-1-10
TEL:078-574-0701 / FAX:078-574-0702
Internet <http://www.pure.ne.jp/~ngo/>
E-mail ngo@pure.ne.jp
口座番号:01180-6-68556 (郵便振替)



海外災害援助市民センター

実現へ構想委が始動

阪神・淡路大震災の教訓を生かし、民間レベルで海外の被災地を支援する拠点となる「海外災害援助市民センター(仮称)」の構想委員会が19日、神戸市中央区の神戸YMCAで初会合を開き、設立に向けて始動した。今後、作業部会を設け、活動内容や開設時期

などを話し合う。神戸大学大学院国際協力研究科の芹田健太郎教授ら五人が呼び掛け人。一月末、神戸市兵庫区に構想委員会準備室を開設し、この日までに四十九人が委員会メンバーとなった。震災後、海外の被災地支援を続ける兵庫県内外のNGO(非政府

組織)、研究者、専門家らが参加している。呼び掛け人の一人、京都巨大災害研究センターの河田恵昭センター長は「海外支援では、国によって求められるものが違う。多様なプログラムを持ち、継続的に対応する仕組みを」と提案。被災地NGO

が参加している。呼び掛け人の一人、京都巨大災害研究センターの河田恵昭センター長は「海外支援では、国によって求められるものが違う。多様なプログラムを持ち、継続的に対応する仕組みを」と提案。被災地NGO協働センターの村井雅清代表は「現地で活動するメンバーの登録制度をつくりたい」と話した。来春神戸市内にオープンし、河田さんがセンター長に就任する「阪神・淡路大震災メモリアルセンター(仮称)」との連携のあり方なども探る。

【二〇〇一年三月二〇日 神戸新聞】

<資金調達WG>

- ◎災害が発生してすぐ動くためには、日頃から資金をプールしておく必要がある。
- ◎日本では寄付の一部が事務経費やプール金にまわるということに、理解を得にくい。寄付者の教育も必要。
- ◎市民センターなので多くの市民が参加できるしくみが必要(協力商品、HPなど)。
- ◎CODEは産学民が連携したしっかりした組織であること、お金の使途がはっきりしていること(運営資金、初動資金、支援プログラムの別を問わない)が発信できればお金は集まる。
- ◎お金の使途を決める委員会を設置する。また、第三者による評価委員会も必要ではないか。

<支援プログラムWG>

- ◎ものを与えるだけでなく、被災者の意識向上をはかる再建プログラムが大事。次の続く持続可能なコミュニティを再建する。現地状況にあった被災者自身が参加する再建プログラム。
- ◎災害サイクル(発災から緊急対応、復旧・復興、準備)を軸にそれぞれのステージでどういう支援が考えられるのかを示す。
- ◎「マニュアル」よりも「事例」の方が役立つと思うので、国内の経験も含めて多様な事例集を作る。

<人材育成WG>

- ◎人材養成は大きく分けると専門家養成と一般への啓蒙という2分野がある。
- ◎専門家養成では医療・建築等の個々の分野の専門家ではなく(ネットワークでカバー)、トータルに状況判断のできるコーディネーターの要請に主眼を起きたい。
- ◎災害は繰り返し起こっているが、学びがない。一般市民に災害への基礎知識を普及させることも大切。

以上のように、各WGで検討しながらCODEの具体像を描きつつある。設立予定日はまだ決まっていないが、来年4月にオープンする兵庫県の「阪神・淡路大震災メモリアルセンター」(仮称)や、機能を強化しつつある国連人道問題調整事務所(OCHA)の動向をにらみつつ準備を進めている。皆さんも是非CODE構想委員会に参加してください。

連絡先:「海外災害援助市民センター」(仮称)構想委員会
担当:細川裕子

〒652-0801 神戸市兵庫区中道通2-1-10

被災地NGO協働センター内

TEL 078-578-7744 FAX 078-576-3693

e-mail: code@pure.ne.jp

振込口座:三井住友銀行兵庫支店 普通 No. 7410510

海外災害援助市民センター構想委員会

「海外災害援助市民センター(CODE)」(仮称)の設立を目指して 構想委員会への参画呼びかけ

阪神・淡路大震災がきっかけとなり、被災地の「市民とNGO」は海外における災害に対して、救援に立ち上がるようになりました。もちろん、震災以前にも同様の活動をしていた市民やNGOの存在はありましたが、これほど大きなうねりになったのは、過去にはなかったことだと思います。

震災によって、私たちは他の被災地の人たちが置かれる困難な状況に対する「想像力」を持つことが出来ました。海外約90カ国からの援助に対しての感謝の意味も込めて「困ったときはお互いさま」という助け合いの精神が育ってきました。私たちは、「支え合い」に国境はないということ、「人権の確立」を忘れてはならないということ、震災から学んだのです。

震災後、被災地KOBEを中心に、海外の災害救援に取り組む多くの市民・団体が生まれ、多様な活動が行われてきました。しかし、阪神・淡路大震災の経験と教訓を活かした成果が認められるものの、まだ多くの反省と課題が残されています。

海外における災害救援をより有機的に展開するため、課題を整理し、多くの知恵と経験を共有しつつ、市民による草の根の国際協力を促進する場が必要であることは、2000年1月の「市民とNGOの『防災』国際フォーラム」で採択された「2000神戸宣言」の中にも謳われました。私たちは、直ちにその場の設立を呼びかけるのではなく、どのような構想を持って設立していけばいいのかを広く検討する場を持つことからスタートしたいと考え、「『海外災害援助市民センター』(仮称)の設立を目指す構想委員会」への参画を呼びかけたいと思います。

震災後、理化学研究所地震防災フロンティア研究センター、都市防災研究所アジア防災センター、神戸大都市安全研究センター、国連地域開発センター防災計画兵庫事務所、国連人道問題調整事務所(OCHA)アジアユニットなどが設立され、さらに阪神・淡路大震災メモリアルセンター(仮称)も工事が始まりました。私たちが提案するセンターは、あくまでも市民が考え、発信し、行動するための拠点ですが、研究機関や行政が集約する機能を市民が共有できるようにつなぐことも大切な役割なのではないかと考えています。

震災直後、機能不全を起こした行政を頼らずに、市民は「私たちに何が出来るのか」を自分たちで考え、行動してきました。このKOBEの知恵と経験を、普通の市民が海外の被災地と自由に行き来し、伝えることこそが被災体験を持つKOBEの役割です。

市民が行動する拠点をどう作っていくか、「『海外災害援助市民センター』(仮称)の設立を目指す構想委員会」の設置と参加を、皆さんに呼びかけます。

2001.1.31

呼びかけ人

代表

芹田健太郎 (市民とNGOの「防災」国際フォーラム・実行委員長
神戸大学大学院国際協力研究科・教授)

今井鎮雄 (神戸YMCA・顧問、PHD協会・理事長)

河田恵昭 (京都大学防災研究所巨大災害研究センター・センター長)

室崎益輝 (神戸大学都市安全研究センター・副センター長)

林 同春 (神戸華僑総会・名誉会長、兵庫県外国人学校協議会・会長)

市民セミナー・寺子屋の御案内

被災地NGO協働センターの2001年度事業の中から、今回は市民セミナー・寺子屋の事業についてご紹介いたします。

REPORT

市民セミナー・寺子屋パオ

当センターでは「阪神・淡路大震災『仮設』支援NGO連絡会」の当時から、不定期ではありますが、「寺子屋」と称した勉強会を開催し、講師をお招きして様々な分野の人に講義を受けてきました。

そして昨年度よりまた新たに寺子屋が「市民セミナー・寺子屋パオ」として復活しました。

昨年度は兵庫県の緊急雇用の人材派遣を受け、半年間月1回定期的に「寺子屋パオ」を開催してきました。草地賢一氏を偲んで「災害救援と国際協力」というテーマで行われました（詳細は右記参照）。草地賢一氏とゆかりのある人から国際協力で興味のある方まで定員25人という小規模な「場」ではありましたが有意義な時間を過ごすことが出来ました。講義だけではなく、新たな人とのつながりは、参加者の皆さんにとっても、もちろん我々スタッフにとっても貴重な財産となっています。

大変有意義な「場」であったことと「くらし」を考える絶好の機会であることから、今年度に入ってからテーマを設定せずに開催しています。表だってはいませんが、広義の意味で言えば「地域」という課題になると思います。市議員、公務員として、コミュニティービジネス、子どもの観点からそして9月は障害者の立場からと講師陣・テーマは多方面にわたっています。それぞれ立場こそ違いますが、皆一様に様々な角度から「地域とくらし」に密着した視点からの講義となっています。

次ページにありますようにテーマを「市民防災」に絞ったもう一つの「寺子屋・市民防災」は、昨年度同様兵庫県より人材派遣の助成を受けています。ここではテーマを限定していますが、やはり「地域とくらし」が隠れたテーマでないかと考えています。8月より半年間月一回のペースで開催していきます。

様々な角度・分野から多くの人の講義を受けたいということで、「市民防災」と「市民セミナー」の2本立てで、現在のところは月2回開催していく予定です。セミナーでははじめに講義を約1時間ほどお聞きし、その後食事を囲みながらざっくばらんに交流をしています。講義の1時間というのは、人によっては短いように感じたりもしますが、食事を挟みながらの交流、その後の質疑応答では活発な意見交換が行われています。

このようなセミナー「寺子屋」を活性化させることで、我々スタッフはもちろん参加者それぞれが、それぞれの立場で「地域」そして「くらし」を考える「場」の提供をしていきたいと思っています。そしてさらには、今年度の事業方針にもありますように、「知」と「地」が結びつき、「豊かなくらし」さらには「息のできるくらし」を追求し、より強固な「セフティーネット」の形成につながるものと考えています。

今後この寺子屋で参加者の皆さんのご意見を取り入れながら、様々な分野から講師をお招きして講義が聞ければと思っています。

また、議事録等ご入り用の方は実費でお分けいたしますので、当センターまでお申し付けください。

(被災地NGO協働センター 仲江川徹)



2000年度セミナーの講義録については「災害救援と国際協力」という冊子にまとめてあります(B5版78ページ・800円)。お問い合わせは当センターまで。

これまでの寺子屋パオ

<2000年度「寺子屋・パオ」セミナー>

災害救援と国際協力—支え合いは国境を越える—

阪神・淡路大震災後、被災地の多くの人々は海外における自然災害に対し、積極的に救援活動をしてきた。「困ったときは、おたがいさま」が海を越えて共有されてきた。市民による災害救援という国際協力のあり方が、これからの国際社会にとってどのような意義があるのか？阪神・淡路大震災の検証をしつつ、これまでの災害救援を振り返り「安心で、安全な国際社会」を目指して学習する。

■2000年8月1日(火) セミナー開催記念講演
芹田健太郎 (神戸大学大学院国際協力研究科教授)

■2000年9月14日(木) 第1回
国際社会における日本のNGOの変遷
芹田健太郎 (神戸大学大学院国際協力研究科教授)

■2000年10月17日(火) 第2回
60年代以降の日本の市民活動の変遷
松本 誠 (神戸新聞情報科学研究所)

■2000年11月24日(金) 第3回
震災後、海外における災害救援活動の変遷
村井雅清 (被災地NGO協働センター)

■2000年12月22日(金) 第4回
海外災害救援活動の実践レポート
鈴木隆太・仲江川徹 (被災地NGO協働センター)

■2001年1月25日(木) 特別講演
これからのNGOのあるべき姿
牧田稔 (前神戸YMCA副総主事)

■2001年2月15日(木) 第5回
国際協力と地域との関わり
増田大成 (農業クラブ主宰)

<2001年度「寺子屋・パオ」セミナー>

■2001年3月16日(金)
井坂君を囲む集い
いさか信彦(神戸市議員)

■2001年5月21日(月)
箕面に学ぶ元気なまちづくり
重松剛(箕面市役所NPO担当職員)

■2001年6月21日(木)
NPO/NGOが築く新しい市場—もう一つのイノベーション—
田井修司(立命館大学政策科学部教授)

■2001年7月25日(木)
教育サポートから見えてきたこと-子ども・親・地域-
能島裕介 (特定非営利活動法人BrainHumanity 代表)

次回の寺子屋パオ

■9月21日(金) 18:30~21:00
「これでも障害者、されど障害者」
井奥裕之 (自立支援センターBeすけっと事務局長)
参加費：2,000円(資料代・軽食費込み)

INFORMATION**寺子屋・市民防災**

6月にトルコのイスタンブールへ、「トルコKOBE防災交流団」の一員として自主防災の経験・情報交流の旅に行ってきた。

現在のトルコの人たちとわれわれの大きな違いは、しばらく大きな地震はないのではないかと神戸と、こんど大きな地震が起きれば自分たちの街に大災害が起きるといふ危機感のあるイスタンブールの違いである。

そのために彼らの防災への取り組みは、現在の神戸にとっても多くの学ぶべきものが多かった。彼らのような取り組みが、震災前の神戸で行われていたら、われわれの被害はかなり減らすことができたであろう。

何が違うのか。それは防災に対して、行政依存でなく、市民自身が自主的に「いざとなったら自分たちの生命や財産は自分たちで守る」ことであり、それができるのは地域のコミュニティの支え合いだという認識である。

そのため彼らは綿密な防災マニュアルを作成し、防災資機材もかなり整備し、災害時の貯水槽、自家発電の準備をするまでになっている。

彼らの街である、カドキョイ市のモダ地区をいっしょに「街歩き」をし、建物の地震発生時の危険性、耐震基準、違法建築などについて論議をした。その後、自分たちの街を再点検するため、「図上訓練」作業もいっしょに行った。そのほか神戸代表団のために講演会も用意され、「災害サイクル～阪神大震災の教訓から～」という報告も行った。それらはお互いに大変有益なものであった。

阪神大震災からわれわれがえた最大の教訓は、防災は市

民が主役だったという事実である。しかし、その「市民力」も、神戸では正しく理解され、評価されているとはいえない。いまだに都市防災の領域でも、行政が役割を独占していて、市民が担うべきことまで行政に依存してきている。その結果、被災者を「憐れな人間」として描き、人間の尊厳と自立する権利をそこなうことになってしまった。その結果、行政への不信とたくさんの「甘えの人間」を生み出してしまった。

これらの課題の解決のために、これから半年間、被災地NGO協働センターでは、「寺子屋・市民防災」セミナー事業を行い、市民防災の講座と交流事業を行うことになった。

その主な目的は、防災福祉コミュニティのように地域を基盤にしてきた防災活動と、ボランティア・NPO・NGOなどの活動、および企業、事業所、ひいては医療・福祉施設など広範な市民が協力して、市民防災への連携をすることである。

阪神大震災からすでに6年半が過ぎた。当初の必死の思いで献身的に努力した時期は終わっている。いまは、その時の状況は今から思えばどうであったか、それまでしてきたことは適切であったかを、それぞれの立場で冷静に、かつ客観的に見つめ直すことのできる時期である。

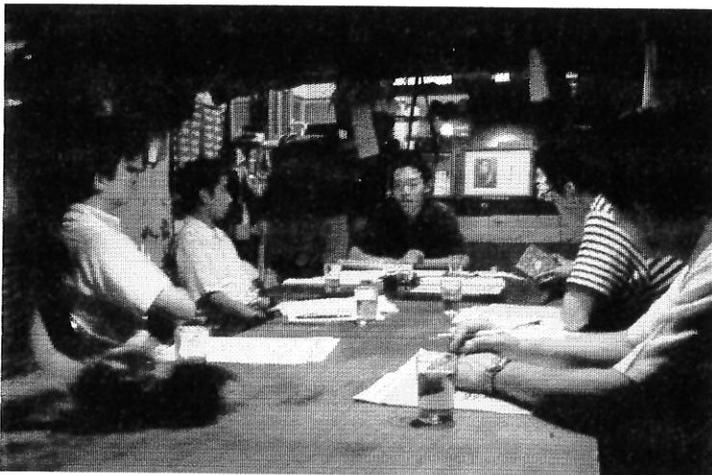
それならば、あらゆる災害から生命、財産、暮らし、コミュニティを守り、日常の生活を維持し、確保するには、どうしたらいいのか。防災を暮らしの一部にするにはどうしたらいいのか。地域の防災力を高めるにはどうすればいいのか。世代間の共生はどうしたらいいのか。多くの課題が生み出されている。

このセミナーが、皆さんとともに、これらの課題に少しでも答えられることを願っています。

(被災地NGO協働センター 井上哲雄)

■8月28日(火) 寺子屋・市民防災 第1回■**「おもしろい防災の話」**

大津暢人(京都市北消防団鳳徳分団班長)



8月28日に行われた第1回目の「寺子屋・市民防災」では、神戸市出身の京都在住の大学生、大津暢人さんを講師に招いて行いました。大津さんは現役の大学生でありながら、現在住んでいる京都市中京区で地域の消防団の活動に取り組んでいます。

普段あまり知られていない消防団の実体や、阪神・淡路大震災の折には消防団が負傷者の救助に大きな役割を果たしていた事実、高齢化が進む中で若者を巻き込みながら活動する大津さんの分団の様子など、地域で根を張って活動する消防団の原状を中心に話が広がりました。

大津さんが感動した言葉として紹介されたのが、足立区職員の「私たちは災害があったら皆さんのために何もできません。でも普段はかなりのことができます」という一言。自分の身や自分達のコミュニティを守っていくためのカギの一つがこの中に潜んでいるような気がします。

また地域のNPOとの連携も課題として話題になりました。市民活動の側から災害救援に関わっている私たちも共通で取り組んでいかなければならない事だと思いました。

10月以降の日程・講師などにつきましては、内容が決まり次第ホームページに掲載していきます。もちろん電話やFAXでのお問い合わせも結構です。

- 10月 第3回 まちの保健室
- 11月 第4回 メディアからの証言
- 12月 第5回 ～現在調整中～

これからの「寺子屋・市民防災」

■9月25日(火) 18:30～21:00

第2回「長田の火災を振り返って」

魚住好司(神戸市消防局指定防災インストラクター)

参加費:2,000円(資料代・軽食費込み)

REPORT

インド西部地震救援活動

2001年1月26日、インド西部のグジャラート州において、マグニチュード7.9の地震が発生。20,000人とも50,000人とも言われる犠牲者を出した。

あれから5ヶ月。インド西部地震救援委員会は、2月、4月とすでに2回、スタッフを現地に派遣し、被災現場の支援プログラム、支援サイトなどを決定してきた。

その後の状況として、インドのNGOの働きや、被災現場のその後の復興状況などをモニターするため、第三陣として事務局から鈴木隆太を派遣した。



（パタンカ村の様子・鈴木隆太撮影）

3年、それがなければ来年の3月までとのこと。

今の段階ではまだ決定していないが、今後現地で活動するスタッフへの引き継ぎが重要な課題になる。

<NGOsKOBEOの募金>

今の段階で60,000ドルの支援と10,000ドルの事務経費を出す準備があることを伝えた。しかし、NGOsKOBEOとしては、他のメンバーの団体に対して、パタンカ支援についての協議が必要であることは伝えた。これについてもSEEDSの窓口となっているマヌ氏は了承してくれた。

■ダッタラナ村について

すでに4月の時点で、SEEDSのメンバー、SEWAのスタッフ、NGOsKOBEOのメンバーともにダッタラナを訪問し、50件の再建、コミュニティーセンターの建設という支援を住民と約束している。

しかし、カウンターパートであるSEWAからの連絡が遅れているため、今は支援がストップしている状態。SEEDSはすでにパタンカ村の支援を開始しているが、SEWAとの調整が取れ次第、同時にダッタラナも支援していく意向である。したがって、みなさんからの寄付の残金は、しばらく保管し、整理ができた段階で、ダッタラナへの支援として使用していく。

また、これについてはNGOsKOBEOからもSEEDSのスタッフに対して「我々は少なくとも住民と約束した支援は守らなければいけない」ということを伝えており、これについてもSEEDSのスタッフは了承している。

【今後に向けての提案】

・クラフト

今後、インド西部地震の支援として、クラフト(手工芸品)販売を通じたキャンペーンを行っていく。これは、私たちが支援している村も含め、今回の地震で被害を受けた地域の多くでクラフトの作成をしている。そのため、クラフトの販売を通じて現地の支援(手芸品・工芸の制作者である女性、またこれらのクラフトを媒介としているSEWA)を改めて呼びかけていく。

・スタディツアー

今回の地震で被害にあった地域のモニタリング(事後調査・視察)を中心にスタディツアーを企画する。これを通じて市民にもっと災害救援に目を向けてもらい、理解を図っていく。

(被災地NGO協働センター 鈴木隆太)

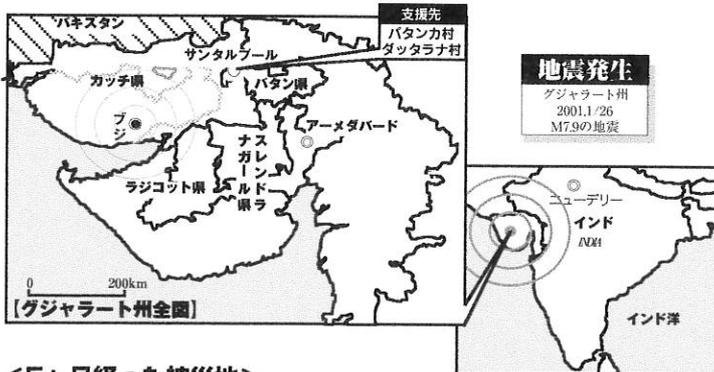
募金の振込先:

郵便振替 口座番号 00960-2-12443

加入者名 災害救援委員会

* 通信欄に「インド西部地震」「NGO災害救援金」のいずれかをご記入下さい

* 「NGO災害救援金」とは? 各救援委員会の責任において同時進行で救援活動を行っている被災地に柔軟に送金することを前提に集めている募金です。合わせてご支援の程よろしくお願いたします。



<5ヶ月経った被災地>

1月の地震から、すでに5ヶ月が経った。被災地では、すでにガレキの撤去が進んでいるところ、また未だに進んでいないところとが分かれていた。被災地は、そういう意味で非常に地域によって温度差があると感じられた。

被災地では、未だにテント暮らしで生活をしている人、またすでに自分自身で家の再建をしている人、違う地域に移ってしまった人などがおり、その復興の進み具合も人によって様々であった。これからの復興の道のりの長さを考えさせられた。

【NGOsKOBEOの支援サイト】

■パタンカ村

当初、前回3~4月の派遣時に決定したダッタラナ村での支援活動があったが、協力団体であるSEWAのコーディネートなどの事情から調整が遅れ、はじめに違う村の支援活動を開始し、そこから徐々に進めていく、という方針を出した。その村はパタンカという村であり、ここからの支援を開始することとした。

<支援内容>

ここで協力団体となっているのはSEEDSという現地のNGO。まず、村の中で一番貧しい家の再建を始め、その家の再建を通じて建築労働者に耐震設備などのトレーニングを行っていく。建築労働者は村の住民の中から選出。この貧しい家一軒については、SEEDSからの寄付という形で行っていく。

その後、村の中から10件ずつの建築を行っていく。基本的には家の再建の費用は政府から支給された補助金を住民が使い、SEEDSからは耐震設備に必要な部品や材料などを支援していく、という形。

また、パタンカの建築労働者が、この再建を通じて得た技術を持って他の村に行き、彼ら自身がトレーナーとして各村で活動をしていく、という案もNGOsKOBEOから提案し、これについてはSEEDSのメンバーも理解を示している。

<長期的な体制について>

8月15日までは、建築家2名、コンサル・事務各1名の体制で、それ以降については、エンジニア1名(村のスーパーバイザー的役割)、建築家・事務各1名の体制で行うとのこと。期間については、調整をすすめている大使館・JICAの支援が決まれば

REPORT

高知県西部水害

震災がつなぐ 全国ネットワーク

「震災がつなぐ全国ネットワーク」は国内の災害救援を行うNGO/NPO・ボランティア団体などが、災害時の緩やかな連携や、平常時からの備えや検証・提言活動を行うため活動しているネットワークです。事務局は当センターです。

台風と秋雨前線の影響を受け、9月6日未明、高知県西部で集中的な大雨が降りました。中でも土佐清水市と幡豆郡大月町に被害が集中し、床上・床下合わせて1,100軒以上が浸水する被害を受けました。

水害発生翌日の9月7日、高知県社協や現地のNPO関係者が被災地に向かい、状況把握とともに復旧支援のボランティアセンター設立の準備を進めました。高知では1998年秋にも高知市一帯で集中豪雨による水害があり、その時活動したメンバーが即座に行動に移りました。また「震災がつなぐ全国ネットワーク」も全国各地の参加団体に、募金活動やコーディネーター派遣の準備、情報発信などの支援準備を呼びかけました。

9月8日から現地にボランティアベースキャンプを設け、本格的な活動を開始。日本青年奉仕協会から派遣されている阿南健太郎さん・とちぎボランティアネットワークから派遣されている早乙女智さんのレポートによると、水は短時間に来て割と短い間に引いたようですが、場所によっては2階の床まで水が来た場所もあり、道路も各地で寸断されたため、9月11日になってようやく作業に入れるようになった場所もあります。

主な活動は水に浸かった家の片付けですが、泥水に使った畳や家具は廃棄処分せざるをえないものも多く、泥の撤去やそう



大月町
土佐清水市

じ、家具家財の洗浄など、一軒の家に4~6人くらいがかかる作業になっています。水害発生から5日経っても水道が使えない場所があるため、川の水をポンプアップしながら水洗いの作業をしている場所もあります。

高齢者からの依頼が多く、自分だけでは片付けが進まないようです。地元のテレビで放映されている避難所の様子でも、疲れた顔が目立っています。

ボランティアは連日1,000人前後の人々が参加し、地元の高校生なども活発に活動しています。単なる需給調整だけでなく、高齢者や障害者への配慮など、災害時だからこそその丁寧なコーディネートが求められます。

土佐清水市・大月町のボランティアベースキャンプは9月24日まで開設予定。最新の情報は以下の「高知県西部豪雨災害ボランティア情報」のホームページから見る事が出来ます。

<http://www.pippikochi.or.jp/plaza/saigai/index.htm>

また、物資の受付はありませんが、以下で活動支援金を募集しています。皆様のご協力をお願いいたします。

募金の振込先：

○高知県西部豪雨災害ボランティア活動支援本部
四国銀行 県庁支店 普通 口座番号0395023

口座名 高知県西部豪雨災害ボランティア

活動支援本部 代表 山崎 水紀夫

○震災がつなぐ全国ネットワーク

郵便振替 口座番号 00920-7-75997

加入者名 震災がつなぐ全国ネットワーク

*通信欄に「高知西部水害」とご記入下さい

== いずれもボランティア活動に対する支援金です ==

市民社会の形成に向けて

震災6年・KOBEで動き始めた市民の足音

KOBEの市民活動の担い手達は、自分たちが主体となる市民社会の形成に向けて、少しずつ勉強会や研究会を重ね、新しい「しくみ」を形作ろうとしています。もちろん被災地NGO協働センターも、積極的にこれらの場に参加・参画しています。地道な活動ですが、未来へ向けての市民のシンクタンクです。動き始めたKOBEの市民の足音を紹介していきます。

兵庫人権フェスタ2001

「兵庫人権フェスタ」は「人権」をテーマに、兵庫県内の若者が集まって企画しているイベントです。

障害者問題や被差別部落問題、定住外国人や震災被災者の支援など、それぞれのテーマで市民活動を行っている団体や個人がたくさんあります。が、普段の活動の中ではテーマを越えて連携することはあまりありませんでした。

障害者問題を考える兵庫県連絡会議・若者研究会のよびかけで、これらの若者が集まったのが1999年。「人権」を共通の課題に、互いの多忙な日常の活動の合間をぬって企画を練り、2000年秋に第1回のフェスタにこぎ着けました。

協働センターでいえば、被災者支援や災害救援の視点から人権の課題と向かい合っています。そんな中で、定住外国人や障害者、被差別部落といったマイノリティーの角度から人権に取り組んでいる人たちと交流したことは、「共に生きる豊かな地域社会」を考える上で大きな財産となったように思います。

人権フェスタのキャッチフレーズは「隣の人から信じたらええやん」です。それぞれの悩んでいること・知らないこと・わからないことを否定せず、出会い・語り合い・共有出来る場を目指してきました。2001年度のフェスタは右の日程で開催されます。みなさまぜひお立ち寄り下さい。

詳しくは被災地NGO協働センターまでお問い合わせ下さい。



二昨秋開催された「兵庫人権フェスタ」の会場風景

兵庫人権フェスタ2001のご案内

日時：10月14日(日) 11:00~14:00

場所：JR新長田駅南・ピフレ前広場(神戸市長田区)
(入場無料・雨天決行)

主な催し：民族文化披露、バンド演奏

各人権問題に関する展示、飲食・屋台
車イスまち探検、人権スタンプラリー

震災6年半のKOBEが送る最大の話題作

市民社会をつくる

震災後KOBE発アクションプラン 市民活動群像と行動計画

大震災救援で見つけた教訓
復興検証でつかんだ行動指針

被災地でいまでも活動するボランティア・NPO・NGOが
新しい市民社会を築く60のアクションを提言する

貴重な震災体験といまなお苦しい復興の歩みの中から、私たちは次の時代へ何を生かし、受け渡していくのか。苦しみと格闘の中から動き始めた15の市民グループの息吹を受けとめ、失敗と内省から希望を見いだす作業と、その中からの発見が「くらし・地域アクションプラン60」である。

1部 新しい市民社会構築に向かう15の群像

被災地NGO協働センター、阪神高齢者・障害者支援ネットワーク、被災地障害者センター、コミュニティ・サポートセンター神戸、プロジェクト1-2、アート・サポート・センター神戸、阪神大震災復興市民まちづくりネットワーク、西須磨まちづくり懇談会、まち・コミュニケーション、たかとりコミュニティセンター、神戸復興塾、女たちの会社ポレ・ポレ、阪神・淡路まちづくり支援機構、しみん基金・KOBE、市民活動センター神戸

2部 市民検証から見えてきたもの

地縁と知縁の協働—コミュニティ・まちづくり部会の報告／新しいしごとと働き方—
働く場部会からの報告／助けあう・支えあう—社会・福祉部会からの報告

3部 くらし・地域アクションプラン60

くらしと地域を一体にするアクション／市民活動の発展と協働のアクション／公共領域を市民が担うアクション／市民社会を構築するアクション



震災復興市民検証研究会 編著

震災復興市民検証研究会：編著
市民社会推進機構：発行
定価1,500円（税別）

被災地NGO協働センターでも取り扱っています。

冊子のお送り先と冊数をTEL/FAX/e-mailで当センターまでお知らせ下さい。
TEL:078-574-0701 FAX:078-574-0702 e-mail:ngo@pure.ne.jp

会員登録・カンパご協力のお願い

当センターの運営は「まけないぞう」などの事業収入や、みなさんからの会費や寄付金、今回の「じゃりみち」でも紹介しているCODE構想委員会、災害救援委員会、震つななどの事務局受託費でまかなわれています。昨年度の収入の内訳を見ると、まけないぞうの売上が3割、会費と寄付金が合わせて2割弱を占め、みなさまの多くの支援の元に私たちの活動が成り立っているのだと、改めて感謝の念を深める次第です。

震災から年月を経て財政事情が厳しくなるにつれ、昨年度は事務所を移転して家賃の軽減をはかるなど経費節減に努めるほか、事務局受託などの収入の確保の努力をしてきました。しかし今年度は、予算上でも繰越金が大幅に減少する等かなり厳しい財政状況となっており、スタッフ一同も普段の活動に取り組みながら、財政的にもより一層の改善をはかるべく努力しています。

今回の「じゃりみち」には、郵便振込用紙と会員登録の申込用紙を合わせて同封させて頂きました。不景気のなか厚かましいお願いではありますが、みなさまの応援をこの場を借りてお願いいたします。また一方で合わせて今後ともより一層のご指導、ご鞭撻をお願いいたします。

編集後記 神戸では異常な暑さの続いた夏でしたが、みなさまの所はいかがでしたか。

ようやくと夏を乗り越えたと思ったら、高知県西部で水害発生の一報。国内の災害救援のネットワーク「震災がつなぐ全国ネットワーク」の事務局でもある当センターは情報収集・発信に大わらわとなりました。

さて、先月もお伝えした「じゃりみち」のインターネット発信ですが、郵送からe-mailに切り替えの連絡を頂いた方には、今回から発行をe-mailでお知らせしています。インターネット版は右記のセンターホームページから見る事が出来ますの

で、インターネットに接続できる環境にある方は、一度のぞいてみて下さい。郵送の「じゃりみち」と同じ内容を掲載しています(一部カラーです!!)

<http://www.pure.ne.jp/~ngo/>

郵送料節減のため、e-mail・ホームページを見る事が出来る方は、インターネット発信へのご協力をお願いいたします。電話・FAX・e-mailで、お名前とメールアドレスを当センターまでお知らせ下さい。

今後ともよろしくお願いいたします。

(被災地NGO協働センター 福田和昭)

ぞう通信。

発行所：神戸市兵庫区中道通2-1-10 〒652-0801

被災地NGO協働センター

<http://www.pure.ne.jp/~ngo/>

第21号 2001.9.12



♡パオ！！
インドへ行く♡

◎◎●おかげさまで第21号を向かえました。●◎◎

「まけないぞう」をご支援して頂いているみなさん！！「まけないぞう」が1998年から走り出して3年間、全国200ヶ所を回り、今回の紀伊半島で最後になりました。この間本当に多くの方々とお会いでき、いろんな気づきや学びがありました。「まけないぞう」がこんなに多くの人たちをつないでくれて、本当に幸せです。

阪神・淡路大震災から今年で7年目となり、「風化」という現実も一方でありますが、キャラバンにまわっていると、あの時のことを思い出します、私も被災地に行きました。私の知り合いもKOBEで被災を受けまし、などなど。それぞれの経験を思い起こしてくれ、また改めてKOBEに対して、想いを深めてくれています。

一人ひとりが辛く悲しい体験をして、誰かと比べたり、他の災害と比べたり、することのできない唯一の体験をしています。そのことを私たち一人ひとりがどう共有し、その現実を次世代に引き継いでいくことが責任であると感じます。

一瞬にして6,432名の命を奪った未曾有の大震災の経験の中から、その人たちの身代わりとして、生まれ変わって誕生してきた一つの形かもしれません。そんな「まけないぞう」が皆さんのお陰で10万頭を越え、多くの方々可愛さ「まけないぞう」を見るたびに、KOBEを思い出してくれることが何より、「風化」を防いでくれています。

また「まけないぞう」「一本のタオル運動」が一つのツールとなつて、日本の人たちをつないでいるだけでなく、世界各地の被災地へも「まけないぞう」を届け、「支え合いの輪」が広がっています。被災地KOBEとしてその責任を果たしていくためにも、これからも「まけないぞう」を通じてKOBEのメッセージを発信していきたいと思ひます。

パオを作っている支援者の方々から次のようなメッセージを頂き、実際に当センターのスタッフがインドへ届けてきました。「パオ」はインドの被災者の方々に大変喜ばれ、大切に飾っていたようです。

「パオ」の制作者の皆さんありがとうございます！！

つゆの晴れ間、今日も暑い日になりましたが、お変わりございませんか
私も母がまだ病院を出ることが出来ず、毎日病院通いで過ごしています。時間も中途半端になり。

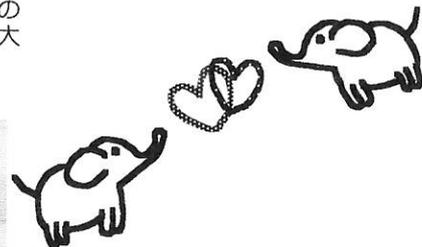
パオもそんなわずかな間に作りしましたので、本日送ります。

この頃暗いニュースが続きます。安全で住み良い社会にするためにはいったいどうしたら良いのでしょうか？
考えさせられる日々です。 京都在住

甲府パオの会から インドへメッセージを 頂きました

いつもお世話になっております。過日のチラシで被災地インドへの支援をしていることを知りましたので、少しでも現地の方にパオをお届けいただいで、元気をだしてい頂ければ嬉しいです。

「こつふ・パオの会」も今までの活動の他にも、地域に根ざした活動を始めております。神戸とのゆるやかなネットワークを保ちながら、今後も歩いていこうと考えておりますので、どうぞよろしくお願ひいたします。



パオーン！！



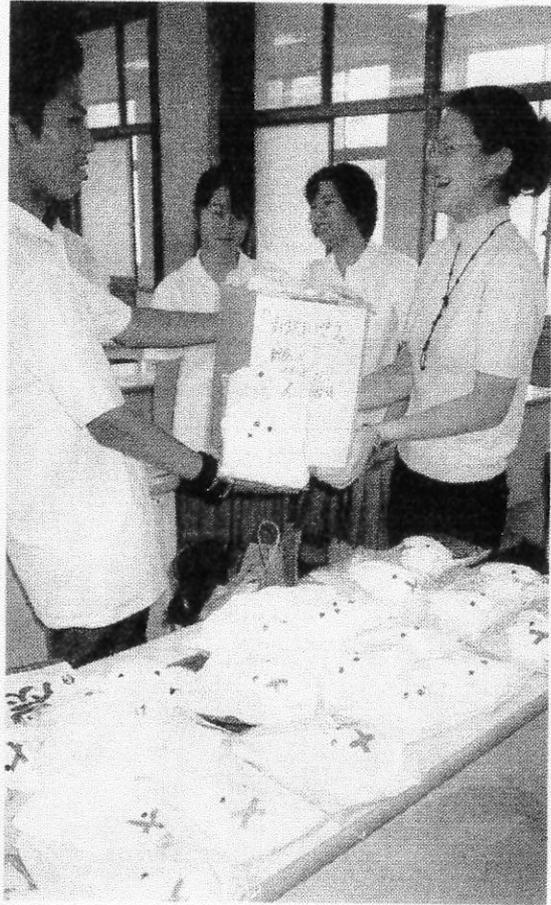
インドぞうはインドで大人気です！！ 被災者の方は、毎日インドぞうをガネーシャ（インドのぞうをかたどった神様）としてお祈りしてくれているそうです。

あ・り・が・と・う from「まけないぞう」with LOVE...

まけないぞう ありがとうキャラバン in 紀伊半島

被災地NGO協働センター

全国へ「ありがとう」 キャラバン来月終了



「まけないぞう」を手に震災を語り合う増島さん(右)と松原高校の生徒たち

二〇〇一年八月一八日付毎日新聞

阪神大震災の被災者の「い」と呼びかけていき、材料のタオルは各地の府立松原高校で、同セ
支援活動をするボランティア「たい」と話している。から善意で寄せられ、販
「たい」と話している。から善意で寄せられ、販
売でも、全国のボランティア(30)は生徒たちに「皆さ
協働センター(神戸市) かけは、同センターが97 イア団体や学校などが協
が98年から始めた「あり」年に始めた「まけないぞう」力した。キャラバンは協
が「まけないぞう」が、う事業。震災で失業した 力してくれた人々に、お
9月中旬に日本全国を回り、心に痛手を受けた人 礼の気持ちを伝えたい」
ちも、やっとな震災の話が
できるまでに元気になり
ました」とあいつ。同
高1年の岸本延子さん
(15)は「震災は町がきれい
になっても終わりが
なく、みんなが心に残し
ておくことが大切だとわ
かったと話していた。
同センターは078・
574・0701。」

【渡辺暖】

り終える。震災の時の支 たちの心のケアにつなげ どの思いから始まった。
援に感謝しながら訪問し ようと、被災地のお年寄 「まけないぞう」を積
た学校や団体は、約3年 りらがソウの顔型に加工 んで、沖繩を除く全国各
間で約200カ所、走行 した壁掛けタオル「まけ 地をアロックごとに車
距離は2万キロ以上にもな ないぞう」を手作業で作 回る。今年7〜9月は最
った。同センターは「今 り、同センターが販売す 後の紀伊半島ルートで、
後も被災地の現状を全国 1個400〜700 9月16日にゴールの予
に伝え、「震災を忘れな 円で、既に11万個が売れ 定。先月、大阪府松原市

3年で200カ所訪問

- 7月7・8日 滋賀県彦根市 「ひこねエコフェスタ2001」
- 7月14日 和歌山県西牟婁郡串本町 串本道場
- 7月14日 和歌山県和歌山市 高山寺
- 7月15日 和歌山県和歌山市 和歌山道場
- 7月19日 大阪府松原市 大阪府立松原高校・終業式
- 8月4日 滋賀県彦根市 花しょうぶ通り商店街
- 8月11日 愛知県名古屋市 「東海豪雨の検証シンポ」会場
- 8月19日 奈良県生駒郡平群町 信貴山・骨董市
- 8月24・25日 三重県鈴鹿市
- 8月26日 三重県桑名市 桑名教会
- 8月29〜31日 三重県津市 国際看護学術集会
- 9月2日 三重県伊勢市 ジョイの会
- 9月15・16日 滋賀県長浜市 花養寺

「まけないぞう・ありがとうキャラバン」が1998年に北海道をスタートしてから、日本全国を駆けめぐり、21世紀を迎えて今年で最後になりました。

今回は紀伊半島を中心に、三重県・和歌山県・滋賀県・奈良県・愛知県・大阪府(……ちよつと紀伊半島からはみ出ている場所もありますが……)をまわりました。

この「ありがとうキャラバン」は今まで「まけないぞう」を通してご支援して頂いた方々に「ありがとう」というお礼をみなさんの街にお伺いして、直接伝えたいという想いから始まりました。大阪府松原高校では生徒さんたちが「今後文化祭などで「まけないぞう」をPRする事で、後輩たちにずっと引き継いでいけるし、震災のことも思い続けてくれる」と文化祭で関わってくれることになりました。また、長田で被災された県外被災者の方が、神戸のお話をし、涙ぐまれていた方など。い

んな形で「まけないぞう」がみなさんのそばにいて、何かのお役に立てれば幸いです。そんなこんなで、雨にもまけず、風にもまけず、夏の暑さにもまけず、そして嵐にも雪にもまけず(これ本当の話)キャラバン隊は日本を走り続けてきました。この間新聞記事にもありますように、200ヶ所もの地域をまわり、触れ合うことが出来ました。本当にいろんな人たちがいて、いろんな生き方に出会い感動しました。あの震災から生まれた「まけないぞう」がこんなにたくさんの素晴らしい人たちをつないでくれました。

今回の紀伊半島もおじゃまして、また新たな出会いと感動をいただきました。猛暑の中を走り続けた「まけないぞう」も暑さを吹き飛ばす勢いで、支援者の皆さんの絆を深めてくれました。キャラバンにご協力頂いたみなさま本当にありがとうございました。

まけないぞう ありがとうキャラバンin 紀伊半島

和歌山県田辺市の高山寺の夏祭りでは、たくさんの人

たちで賑わい、顔役の方や、また別の男性がお手伝いをしてくださいました。その方は親子ぞうを通常700円で販売しているのですが、ボランティアに協力して下さいと言うことで、「ほんまは700円やけど、1000円もろつて、お釣りの300円は“いらんぞう”なんてね!!」と言いつつ、お知り合いの方たちにたくさんのご協力を呼びかけて頂き、何と100個近く販売して下さいました。他の役まわりの人たちにも走り回って、協力を呼びかけて下さいました。その方は震災直後に親戚がいて、応援に駆けつけてくれたそうです。

「あの時はほんまひどかった」と……。顔役さんが、声をかけて下さい、もうひと方が販売して下さいる2人の連係プレーで、親子ぞうが見る見る飛び立っていきました。中にはご年輩の方で、顔役さんが「あの人は戦艦大和に乗った人だ」と教えて下さいました。時代の流れを感じる瞬間でした。戦争のことも震災と同じように忘れてはならない事だと感じています。でも戦争に関してはそれを伝えていく人たちが少なくなり、若い世代に伝え語り継いでいける機会をもっと増やせたらと感じました。そんな中夜は更けていきました。

夏の夜の暑さで、全身汗びっしょりになりながら、お手伝いをして下さいました。本当にありがとうございました。その方は「私もこんなボランティアができてうれしい」とおっしゃって下さいました。

和歌山県の立正佼正会では、白血病になった青年の方がいらして、入院中「まけないぞう」を見て、「震災にあった被災者の人たちががんばっているのなら、早くも早く元気になろう!!」そして、退院したらこのまけないぞうをいっぱい買いたい」とおっしゃっていたそうです。青年が病気になって、この人の命を救おうと、みなさんが協力して800万円ものお金を集めたそうです。一人の命を救うため、たくさんの人が支え合い励みあったということはとても素晴らしいと感動しました。そして人はみんなが集まれば大きな事も出来るんだと改めて実感しました。

残念ながらこの方は今年に入りお亡くなりになったそうですが、今でもその病院には、「まけないぞう」がたくさん飾られているそうです。心からご冥福をお祈り申し上げます。



七月
キヤ
ラバ
ン・
田辺
市高
山寺

「まけないぞう」事業にご協力をお願いいたします!

「まけないぞう」の仲間たち、オリジナル400円、リングぞう500円、親子ぞう700円です。結婚式や記念大会、学校の文化祭など、何か節目のイベントなど、神戸から心のこもった「まけないぞう」をプレゼントにして、想い出づくりしませんか? KOBE・震災のシンボルとして、みなさんのそばに届けて下さい。

作り手からのメッセージ

キャラバンに行ってしまうと、ぞうさんが作れなくて淋しい。やっぱぞうさんがいないと、手持ちぶさたで退屈です。

みなさんに喜んでもらえて、うれしい。またかわいいうぞうさん作ります。

←キャラバンの間、KOBEではまけないぞうの回収をお休みにしていました。でももう戻ってきたから大丈夫。みなさんにいっぱいメッセージを伝えてきましたよ!

支援者からのメッセージ

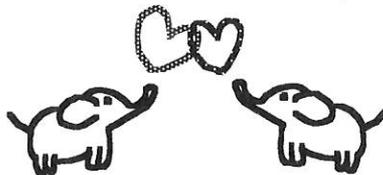
突然のお手紙失礼します。

私たち岐阜県にあります、サンビレッジ国際医療福祉専門学校介護福祉学科1年のボランティア係と申します。

この度、当学校の先生の紹介により、「まけないぞう」の「一本のタオル運動」を知りました。私たちは、この運動に参加させていただきたいと思いました。1年生、2年生問わず呼びかけたところ、103本のタオルが集まりました。

このタオルが、少しでも皆様のお役に立てれば幸いです。又、私たちに協力できる様なことがございましたら、お声を掛けて頂ければと思います。

サンビレッジ国際医療福祉専門学校



ここ北海道にもようやく夏がやってきました。そちらは暑い日が続いているんでしょうね。

体調に気をつけて、かわいいうぞうさんを世界中に届けて下さい。
北海道在住 女性

↑お便りを紹介するのが遅くなってしまいました。もう秋の気配ででしょうか。

「まけないぞう」からのメッセージ

私はKOBEで生まれました。
私たちは一人ひとり顔が違ふんだ。
私を生んでくれたお母さんは、
悲しいことがあったけど、
私を産んで元気になったの。

何があっても
「まけないぞう」つて……

時々みんなが
「がんばるぞう」つて呼んでる
いろんな人、
いろんな事があるけど
私とみんなの想いは一緒……

from KOBE with LOVE

↑学校の皆さんで「一本のタオル運動」に取り組んで下さったという嬉しいお知らせです。震災から6年半を経て、今もKOBEの支援を続けて下さっていることに、タオルとともに温かい気持ちも一緒に寄せて頂いた気分です。ありがとうございました。

皆さんすでに、ご存じの通り、アメリカで世界を震撼させる同時テロが発生し、多くの犠牲者を出しています。私たちはこれまで、自然災害に対する支援活動を行い、防災や減災について、活動してきて、こんな悲惨な事件が人間の手によって引き起こされることに憤りを覚えます。罪もない多くの尊い命が奪われ、深い悲しみとともにあります。人が憎し見合い、過去にも多くの戦争が引き起こされ、その度に、尊い命が奪われ、何度人間はこのような悲劇的な現実を繰り返して行くのでしょうか。犠牲者の方々に心よりご冥福をお祈り申し上げます。